
君が好きだと言える日に。

ちさと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が好きだと言える日に。

【Nコード】

N3261C

【作者名】

ちさと

【あらすじ】

ある暑い夏の日僕は彼女に出会った。そして当たり前だった日々がこんなにも楽しくて、こんなにも悲しいものだと思っていく。そんなすべてを与えてくれたのは彼女で…。この夏、僕は一生分の恋に落ちていく。

第1話：笑えない日々

あれは暑い夏の日だった。

太陽の光が地面をじりじりと照りつけ、僕の方へとその足取りを伸ばしていく。

空を見上げるのなんてまっぴらごめんだ。

のどの渇きと、この季節に真っ黒な背広を着ている不恰好な自分に腹が立つてくる。

“この世界に住んでいるほとんどの人たちが僕のような人生を歩んでいるんだ。”

そんな都合のいい考えばかりを張り巡らし、自分を落ち着かせる。

そうでもないといふ今の生活にはとんでもなく耐えられない。僕はそんなちっぽけな男だ。

そんな男にも今日という日はやって来る。だからこの道を歩いているのか……。笑えないな。

一段と暑い日差しが僕へと差し迫って来る。少し立ち止まり、大きく息を吸い込んだ。そしてそっと息をはく。僕なりの気持ち良さが巡ってくる方法だ。

“今日だけは特別だ” そう思い、洒落たカフェテリアに入った。わざわざ日差しの入るガラス越しの席にしたのは、すぐそばでいそくさと道を急ぐ人たちを見て、優越感に浸るため。

あと何分後かには僕もそういった運命になるのに……。本当に笑えないよな。

店内には、ゆったりとした音楽と時間が流れる。静かな空気が僕をのみ込んでいく。メニューを見ると、高級感漂うコーヒーばかりがずらりと並んでいる。

エソプレッソ、カプチーノ、カフェラテ、カフェオレ、カフェモカ
…どれも飲んでくれと言わんばかりの写真映りだ。さて、何にしよ
うか。悩んでいる姿がガラスにうつり、そこには少し後ろめたさが
残る。

優越感は自ずと消えてしまっていた。

そんな姿が注文を決めた余裕に見えたのか、女性店員が注文を聞き
に来た。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

第2話：君の声

バチン！

「また居眠り？こんなに寝てるんじゃないやあ、家では随分とお勉強頑張ってるんでしょね。」

クラス中が笑いでどよめく。僕はそんな中で意識を鮮明に取り戻し、徐々に教科書一冊分に叩かれた後頭部も痛んできた。

“今日は特に痛いな”

そう思いつつも、表情は裏腹ににこやかに笑ってみせた。

隣の女子はまだ笑っている。

クラスで一人ぐらいこんな生徒がいないとつまらないだろうと、自分を正当化しながら羞恥心をかき消していく。

そのあと、僕は職員室に呼ばれた。

その時のコーヒーの匂いと、今運ばれて来たコーヒーの匂いとが重なり合って、僕はそのコーヒーに懐かしさだけを感じながらゆっくりと飲んでいく。

苦手なブラックにしたのは、余計な思いを受け入れなくなかったから。

隣に座っていた老夫婦にもコーヒーが運ばれて来た。

お互いに砂糖とミルクを交換し合い、世間話を微笑みながらしている。そんな幸せの形を真横で目の当たりにしながら、僕は最後の一杯を飲みほした。

この異空間での時間の流れは早く、僕がここにいる理由を徐々に無くしていく。

会計を済ました時も、さつきと変わらず太陽は地面をジリジリと照

らしていた。

そして僕はまた歩き出す・・・。

セミの鳴き声が僕の背中に迫って来るような気がして、僕はより一層早歩きになった。

そんないつもと変わらない日常の中に、彼女の声は聞こえてきた。

「ねえヨシ！頑張ってる？」

あの暑い夏の日に、君の声は確かに僕の元へと届いて来た。

あの時、確かに君は僕の目の前にいて、その瞬間に僕の前にある世界はあんなにも広がったんだ。

第3話・出会い

幾度となく繰り返すセミの声が僕の耳をふさぐ。
ただ、彼女の声はそんな僕の前にまっすぐ届いたんだ。
今でも僕はその時を思い出しでは、笑いながら泣いている。

「ヨシ！頑張ってる？」

目を細める僕に彼女は優しく微笑んだ。空気は静かに流れながらも、彼女の長い髪をゆつくりとなびかせる。太陽の眩しさがその顔を反射させて、僕はさらに目を細めた。

だがいくら考えても僕の頭の中に彼女の記憶がない。
一気に僕のこれまでの人生をフラッシュバックしたが、まるで彼女の顔は出てくる兆しはなかった。そんな状態をリセットできない僕に、彼女は言葉を続けた。

「ヨシ？顔が歪んでる。そんなにぶさいくだっただけ？」

けして穏やかな気持ちになれることはない言葉を僕に投げかけた彼女は、ゆつくりと僕の方へと足を進める。

「その顔は昔から変わってないなあ。太陽にあたるとそうやってすぐ目を細めてた。まあ居眠りの常習犯だったし、太陽が苦手なのはしょうがないか。」

彼女の声が僕へと確実に近づいてくる。

なぜだろう…あの時僕は、君のその笑顔を当たり前に待っていた。

「ねえヨシ！？聞こえてるの？」

彼女の声は僕の目の前に到着し、その表情はしかめっ面が変わっていた。

「そんな大きな声出さなくてもちゃんと聞こえてる。」

僕は想像以上に静かに答えていた。

ただそれができたのは、君が僕の前に現れてくれたから。

あの時君の顔さえ分からなかった僕は、僕の言葉を聞いた瞬間の君の笑顔を一生忘れないと思った。そんな思いに理由はなくて…。

彼女は今日の太陽の下、なんの迷いもなく確かにそこにまっすぐと立っていた。

透き通るような真っ白なスカートをなびかせながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3261c/>

君が好きだと言える日に。

2010年12月29日19時08分発行